

# 亡き家族 生きた証しに

## 紡ぐ記憶

### 阪神大震災25年

常葉大地域貢献センター長

須佐 淳司さん

## 経験語る 使命を感じて

当時の自宅前に立つ須佐淳司さん(左)。今も近くに住宅  
親類とあの日の記憶を確かめた11日、兵庫県西宮市



あの日は猛烈な縦揺れで目が覚めた。数秒程度だった気がするが、布団にしがみついて耐えたと思う。静かになり、窓の外に目をやると路上の車が同じ目線にあるのが見え、大変なことが起きたと分かった。1階にいる家族は、下に降りようとする段の間に倒れ、数段下から先が埋まっていた。

1995年1月17日早朝に発生した阪神大震災。常葉大地域貢献センター長の須佐淳司さん(54)は、当時住んでいた兵庫県西宮市の自宅を両親と祖母を一度に亡くした。あの時、つぶれた1階から聞こえた母親の「痛い、痛い」という最期の声が忘れられない。

須佐さんと同様に2階にいて無事だった弟夫婦と協力し、2〜3時間かけ3人を助け出したが既に息はなかった。救助のきなか、駆けつけた救急隊がすぐにと



須佐さんが住んでいた同じ町内で起きた家屋倒壊の様子(西宮市情報公開課提供)

けつけた救急隊がすぐにとこかへ行ってしまったのを覚えている。助かる見込みがないと判断したのだと分かったが、早くがれきの下から出してあげたかった。その日の夕方、遺体が安置された病院に行くと、3人が入った木の箱が三つ、人が行き来する通路の脇に置かれていたのを見つけ、泣けて仕方なかった。祖母に介護が必要になり、両親が営んでいた写真店はパブル頭壊で経営が悪化。4世代7人が一屋根の下で力を合わせて生きていくこととした矢先の出来事だった。その末路がこれかと。須佐さんが被災体験を語

るのは今回初めてという。これまで意識的に話さず抱えて亡くなったことで、「地震でつらい目に遭った」と言うことにはためらいがあって打ち明ける。四半世紀がたち、母親の年齢を一つ超えた。震災後、夢中で働いて大手旅行会社で、最近少管理職に33歳で就き、結婚もした。「自分なりに生きてきた。少しずつ

気持ちが変わっていったというところかな。人に話すことで、3人の生きた証しが残るのではないかと感じる。理由も一つ。2018年、常葉大が市内に新設した地域貢献センターのセンター長に採用された。南海トラフ地震が懸念される静岡県と接点ができ、「不思議と強い使命感が生まれた」という。

本県は長年、地震対策が講じられ、県民の防災意識も高い。しかし大地震を直接経験した人はそういない。「私が語ることに少しは意義があるのでは。まずは教えることに伝えたい」と考えている。40代半ばで大学教員を目指すようになった。ビジネススクールで経営学を学び、50歳で実現した。悔いのない生き方をしたい。常に自

身と向き合い続けてきたのは、あの地震があったから。やはり自分の人生は震災とともにある。地震から25年の節目を前に11日、須佐さんは当時の自宅や両親の写真店の跡地を十数年ぶりに訪ねた。どちらも別の建物が建ち、あの日の名残はない。「でも確かにここに家族がいた。思うことは一つだけ。もっと親孝行してあげたかった」。そう言って静かに手を合わせた。

(社会部・河村英之)

◇ 6千人超が犠牲になった阪神大震災は17日、発生から25年を迎える。本県出身者や在住者の中にも被災したり、ボランティアとして被災地と関わり続けたりした人がいる。次世代に向け、それぞれの記憶や思いを紡



震災の数年前に撮った家族写真。一番左が須佐さん(本人提供)